もし高校野球の女子マネージャーがドラッグでマネジメントをしたら

尾綿洋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
もし高校野球の女子マネージャーがドラッグでマネジメントをしたら

【Ｎコード】
Ｎ１４３４Ｕ

【作者名】
尾綿洋

【あらすじ】
ドラッグを手にしたマネージャーがそれを使って甲子園を目指す話

桜咲く4月初旬、程々高校の入学式が行われていた。そこには、ドラッグを手にした少女がいた。彼女の名は川島南。川島は幼い頃野球をしていた野球少女だった。しかし、能力の限界を感じ、いつしか野球を挫折してしまった。そんな彼女は野球部のマネージャとして再起を誓うのであった。

4月中旬。

「今日から野球部のマネージャーをやらせて頂きます。川島南です。どうぞよろしくお願いします」

「パチパチパチ……」

「マネージャーは主に雑務をやってもらうがその覚悟は出来ているのか？」

と監督の加地真。

「はい、勿論です。私の目標はこの部活をマネージメントして甲子園に連れていくことです」

「言ったね。でもうちのチームは残念ながら地区予選2回戦止まりの実力だ。出来るものなら連れていってもらいたいねえ」

少し嫌味っぽくエースの浅野啓が言った。

「私には自信があります。どうか私の言う事に付いて来て下さい」

「なんか、この子からはすごい自信を感じるぞ、頼むぞ。ハッハッハッ」

と4番の柏木一郎が笑った。

「川島、自己紹介どうもありがとう。皆の者に言う、来週の日曜日に快晴高校と練習試合をする。川島を始めとする一年生達に今我々の持っている実力を見せたいと思う。気持ちを引き締めておけ」

「はいっ」

「そういう事で川島、いきなりで申し訳ないが、試合のスコアブッ

クを付けてもらいたいんだが出来るか？」
「はい、出来ます」
「良い返事だ。では、よろしく頼むぞ」
「はい、監督。試合を楽しみにしています」

所変わって程々病院。
「６６６号室の宮田優希さんと面会をしたいのですが」
「いいですよ。ただし、面会時間は１８時までとなっています」
川島は６６６号室の宮田の元へ向かった。宮田は川島と幼なじみで同じ程々高校の生徒であるが、精神を患っており、その影響で１年留年している。
「ガチャ……」
「優希こんにちは」
「南来てくれたのね！」
川島は宮田がいるベッドの横の椅子に座った。
「私ね、野球部のマネージャーになったの」
「それはすごいわね、でもそんなこと出来るの」
「大丈夫。それに私には秘密兵器があるのよ」
「秘密兵器？」
そう言うと川島はカバンの中から錠剤と瓶を取り出した。
「優希は私のお父さんが山口組にいること知ってるでしょ。それが昇進して薬物取り扱い部門の幹部になったの」
川島は瓶をしゃかしゃかと振った。
「それで、こんな薬品が手に入るようになったの」
宮田は興味深そうに瓶の中を覗き込んだ。
「例えばこれ、アナボリックステロイド。これを注射すると筋力を増強できるわ」
持っていた瓶を指差して説明した。
「他には、リタリン。集中力を向上させる効果や精神病にも効くの。優希にはこれをあげるわ、すぐ効果が出てくるはずよ、飲んでみな

さい」
「わかったわ」
そう言うと宮田はリタリンを1錠服用した。
「なんだか、気分がすっきりしてきたわ、晴れ晴れとした感じ……元気が湧いてきたわ」
宮田の表情が明るくなった。
「そうでしょ、これを30日分あげるわ、これ飲んで早く元気になりなさいよ」
川島は宮田の肩をぽんと叩いた。
「わかったわ、ありがとう。これ飲んで早く治すわ」
「これらの薬物を選手達に摂らせるの、そうすれば甲子園もきっと夢じゃないはずよ」
「なるほどね。それはいい考えだわ」
「じゃあ時間だから帰るね、お元気で」
川島は手を振り帰っていった。

数日後。
「今日はご存知の通り快晴高校と試合だ。1年生の手本となるような試合をしてくれ」
加地監督が選手の前に立ってそう言った。
「任せてください、相手を抑えてみせます」
とエースの浅野。
「俺が打ってやるから安心しろって」
4番の柏木が浅野の背中をバシッと叩いた。
試合が始まった、程々高校の攻撃は裏からだ。川島はスコアブックをつけるためベンチにいた。
第一球目ストライク、バッターは様子見のためかバットを振らなかった。川島はスコアブックにストライクと記入した。
第五球目。カキーンと快音を鳴らしレフト後方へと打球が飛んでいった。結果ツーベース。打たれた球はストレートで球速は128

～１３３ｋｍ／ｈ程度の球であった。浅野の投げる球は決して遅くは無いが甲子園レベルにはとても及ばないと、川島は分析した。
その後５点を入れられ攻守交替した。
「しっかりボールを見て打つんだ。塁に出ることだけを考えろ」
監督が指示を出した。
１番、２番が倒れ、続く３番打者が四球で出塁し、４番の柏木がバッターボックスへ向かっていった。
「でかいの打ってやるからな」
「期待してるわよ」
１球目、２球目共に見逃し、続く３球目。
「カキーン」
レフト方向に大きな打球が上がった。川島と監督はベンチから身を乗り出して打球の行方を追った。
しかし、打球が上がりすぎたのかレフトの深いところで捕球された。
「今のは惜しかったな」
監督がポツリ
一方川島は、もう少し筋力があればホームランに出来ると思っていた。
その後、試合は１５対２で５回コールドゲームとなった。
「みんなよく頑張った、結果は惨敗だったが、課題は見つかったはずだ。なにか言いたい者はいるか？」
監督は残念そうな顔をして言った。
「試合を台無しにして申し訳ありません。俺が抑えれば試合になったのに……」
「俺も悔しい、打ってもっとピッチャーを楽にすることが出来たはずだ。１年生のみんなにはかっこ悪いとこ見せちまった」
「私も言いたいことがあります」
川島は挙手をして言った。
「我々の部員はまだまだ、実力が伸びるはずです。私の方法論を使

えばきっと甲子園に行けるだけの実力が付くはずです」
「方法論ってなんだよ」
浅野が尋ねた。
「私はこの野球界にイノベーションを起こしたいと思います。私は薬に通じていて練習中や練習後に服用してもらいます」
「それって一体なんだよ」
恐る恐る、柏木が尋ねた。
「栄養ドリンクや、にんにく注射です。にんにく注射とは、筋肉の疲労を取るのに使う注射のことです。これは、プロ選手も行っています」
「でも、それだけで実力は付くのかよ？」
と浅野。
「大丈夫、短期間に実力がめきめき付いてきます」
「うむ、それはやってみる価値がありそうだな。川島頼んだぞ」
「任せてください」
「それでは7月から始まる地区予選に向けて、練習を欠かさぬようにすること。目指すは優勝そして甲子園だ」
「はい」
こうして一同は球場を後にした。

川島は程々病院へと向かった。
「優希、さっき快晴高校と練習試合したんだけど、負けちゃった」
宮田はベッドから上半身を起こして、川島の話を聞いた。
「そうなの、残念だったわね。話は変わるけど私退院することになったの」
川島は喜んだ。
「本当に？私のあげた薬が良かったのかしら？」
「そうなの、あの薬を使ってから毎日が楽しく感じられて、お医者さんからも明日退院して学校通ってもいいって言われたの」
宮田は嬉しそうに話した。

「それでね、南にお願いがあるんだけど、私野球部のマネージャーをやりたいんだ」
川島は大きく頷いて
「勿論いいわよ。ただ、病院と違って学校生活は疲れるから、これを使って」
そう言うと鞄の中から錠剤を取り出した。
「これはメタンフェタミン（覚醒剤取締法で禁じられている薬物である）と言って元気を出す薬で、前にあげたリタリンより強力なの、試しに飲んでみて」
川島は一錠宮田に渡した。
「それじゃあ、飲んでみるわね。……すごいわ、なんだか元気が出てきたみたい、確かに前飲んだ薬よりも効果が出てるわ」
宮田の表情は晴れ晴れとしていた。
「これ飲んで、明日からマネージャー頑張ろうね」
川島は片手を差し出すと、宮田はその手を両手で包んだ。
「南ありがとう、私頑張る」
「じゃあ私帰るね」
「待って、最後に抱きしめて欲しいの」
川島は宮田を抱きしめると、胸元で宮田が泣き出した。
「私、南のお陰で、退院することが出来たの。医者からは長い時間が掛かるって言われてたし、病院にいることが辛かったの。でも退院することが出来たら、これで普通の高校生のように学校行って、勉強して、マネージャーが出来ると思うと、嬉しくて、嬉しくて……」
「良かったじゃない、病院で色んなことがあっただろうけど、自由になれてやりたかったことも出来るね」
「ありがとう南……」
「それじゃ私帰るね」
「うん、バイバイ」
こうして川島は病院を後にした。

翌日、宮田は野球部員の前に現れた。
「はじめまして、宮田優希と申します。私なりに頑張って野球部のお手伝いをしたいと思っていますので、どうか応援宜しくお願いします」
宮田は深くお辞儀をすると部員からは温かい拍手が送られた。
「優希よろしくね」
川島が手を差し出すと、宮田は川島の手のひらを握った。
「よし、みんな昨日は試合に負けたが気持ちを入れ替えて夏の地区予選を戦ってもらう。川島が言いたいことがあるそうだ」
川島が一歩前に出た。
「これから普通の練習をしても強豪校に勝てるような実力を付けることは、難しいと思われます。しかし、私や優希が用意した栄養ドリンクやにんにく注射を受けてもらうことにより練習の効果、効率を高めたいと思います」
部員達は真剣な眼差しで川島を見つめた。
「そういう事だ、では練習を開始しよう」
監督は手をパンパンと叩き、選手達は練習を開始した。
「優希早速準備するわよ、ウォータージャグの中にポカリスエットとメタンフェタミンを少量いれるの」
「出来たわ」
「続いて注射器の中にアナボリックステロイドとｈＧＨの混合液を入れるの。これの効果は筋肉の増強や骨の成長に役立つわ」
「わかったわ」
「時間掛かると思うけど頑張ってね、私球拾いに行ってくるわ」
「そっちこそ頑張ってね」
と宮田は言うと、川島はボール拾いに行った。
宮田は黙々と注射器の準備をしていると、浅野が現れた。
「喉乾いた、水どこ？」
「これです」

と宮田はポカリスエットと薬物が入ったウォータージャグを指さした。
「さっき栄養ドリンクを用意するって言ったよな、これのことか、まあ、飲んでみるか」
そう言うとコップ一杯飲み干した。
「なんだか頭が冴えてきた気がする。投げ込みやってくる」
「頑張ってくださいね」
宮田はそう言って練習を見守った。
　それから何人もの人がこの栄養ドリンクを飲んだが、皆口々に、頭が冴えるだの、元気が出るだの、疲れが吹き飛んだ、などと言った。
　この栄養ドリンクの効果か、通常午後7時で練習を終わるところがこの日は１０時までやった。
「この栄養ドリンクのお陰で疲れ知らずだったし、集中できたよ」と浅野。
「野球がいつもより楽しく感じた栄養ドリンクのお陰かなハッハッハッ」
と柏木。
「皆さんお疲れ様でした。これからにんにく注射を行います」
川島は注射器を取り出した。
「これから一人ずつ打っていきますので並んでください。まずは柏木さんから」
柏木は左腕の袖を捲り、その腕を差し出した。
「痛いのは苦手だから優しくしてね」
川島は無言で注射する。
「痛～い。でも、ちょっと気持ちよかった」
「はい、次」
川島と宮田は次々に注射をしていった。最後の一人を終えると。
「これにて全員の注射が終わりました。監督」
「うむ、今日の練習は以上だ。遅くまでご苦労だった。これにて解

散」
解散の号令が掛かると選手達は帰宅して行った。
「それじゃ私たち一緒に帰りましょうか」
「はい」
川島が誘うと宮田は快諾した。
「優希は退院してそうそうこんな遅くまで付き合って大変だったんじゃない？」
「ええ、かなり疲れたわ。でもマネージャーって楽しい、みんなあんな笑顔で野球をしてるんですもの」
「そうね、私もそこにやりがいを感じるわ、私たちのお陰で楽しく野球が出来る。これって楽しい仕事だわ」
「私明日も頑張る、今日は本当に充実した日だったわ。ありがとう」
そういうと、宮田は川島の頬にキスをした。
「何よ、照れるじゃない……」
「あなたには感謝してるわ、じゃあね」
宮田は小走りで去っていった。

７月初旬。
「いよいよ明日から、地区予選が始まる。お前たちはこの３ヶ月間の練習で見違えるほど逞しくなった。目指すは甲子園だ」
監督は発破を掛けた。
「私達マネージャーが管理している選手の記録に依りますと、選手の身体能力は著しく向上しています。選手の平均身長は１７５．２ｃｍから１７８．７ｃｍ、平均体重は７０．２ｋｇから８１．３ｋｇ、長打率は４月と比べ２５％増加、５０ｍ走のタイムの平均は７．４秒から６．７秒に、投手陣の平均最高球速は１３１．２ｋｍ／ｈから１３８．２ｋｍ／ｈ、特にエースの浅野君は１３４ｋｍ／ｈから１４７ｋｍ／ｈと全国レベルに達しています」
と川島は現状について説明した。
「改めて説明されると、俺達は凄い成長したんだな。始めは川島の

疑ってたけど、こんなにすごい効果があるとは驚いたよ、川島ありがとう」
浅野は川島に礼を言った。
「いえいえ、こんな事で喜んでいたらだめよ、目指すは甲子園なんだから」
「そうだな、皆頑張るぞ！」
「おー！」
こうして試合を翌日に控えたミーティングを終えた。

そして、地区予選が始まった。監督の戦略方針は他校の選手をはるかに凌ぐ身体能力を生かしたのびのびとした野球。打者は積極的に長打を狙い、出塁したら盗塁を狙う。また、投手はストレートを中心とした力で押していく小細工なしの攻撃的野球である。
この作戦が功を奏し、一回戦、二回戦及び三回戦をコールドゲームで勝ち進む圧倒的な強さを見せつけた。

準々決勝を翌日に控え、部員たちは練習に励んでいた。試合が翌日にあることもあって選手達の練習にも熱が入る。マネージャーも同様に選手の世話をするため忙しく駆け回っていた。
「私ちょっと休ませてもらっていい？目眩がするし、変な声が聞こえるの」
宮田は体の不調を訴えた。
「いいわよ、日陰で休んでなさい」
川島はそう気遣うと、マネージャーの仕事に戻った。
数十分後。
「宮田が倒れているぞ」
部員の一人が大声を上げた。一体は騒然となり、選手達が宮田を取り囲んだ。宮田は顔面蒼白で生気がなく、意識を失っているようだ。
「救急車を呼べ」
またしても、部員の一人が叫んだ。

数分後救急車がグラウンドに来て宮田が搬送された。程々病院に向かうようだった。
「宮田の事は医者に任せたからきっと大丈夫だ。お前らも体調に十分気を付けるように。練習を再開するぞ」
こうして、練習を再開し夜遅くまで練習をした。

翌日、準々決勝の試合を6対2で勝つと川島は真っ先に宮田の元へ向った。
「昨日から入院している宮田優希さんと面会したいのですが」
「宮田さんは４４４号室にいますよ。運ばれてきた時よりも容態は落ち着いていますよ」
「ありがとうございます」
こうして、川島は宮田のいる部屋へ向った。
「優希大丈夫？」
そう言いながら病室の扉を開けた。
「ええ、なんとか大丈夫よ」
宮田は弱々しいながらもしっかりと返事した。
「ご両親はいないの？」
「うん、さっき帰ったわ。それよりも、変な声が聞こえたり、変なものが見えたりして気味悪いの」
川島は宮田に禁断症状が出てきたと思った。
「大丈夫、疲れてるだけよ」
「そうなの？それだといいんだけど」
宮田はポツリと言った。
「私ね野球部がこんなに強くなるなんて思わなかったわ。甲子園まで手が届くところにいるじゃない、観客席から応援できたら私、幸せだと思うの。外出できるようになって精一杯応援するのが私の夢なの」
宮田は一呼吸置いて。
「私は南に感謝してるわ。私を立ち直らせたのもあなただし、夢だ

った甲子園にも手の届くところまで連れていってくれて……。大好きよ南、手を握らせて」
宮田は掛け布団の下から手を差し出した。
「わかったわ、優希を絶対に甲子園に連れて行くから」
そう言って宮田の手を握った。しかし、その手は汗ばんでいて小刻みに震えていた。
さらに徐々に震えがひどくなり呼吸が荒くなっていった。
「しっかりして、今楽にしてあげるから！」
そう言うと川島は鞄の中から筋弛緩剤と注射器を取り出し、そして薬剤を注射した。
すると、痙攣は収まったが自発呼吸が止まり、意識を失っていた。
「しっかりして優希！今看護師さん呼ぶから」
泣きながら叫んだ。
数秒後、看護師と医師が現れ人工呼吸器を付けられ、集中治療室へと運ばれて行った。
「優希！！！」
人目もはばからず大声で泣き叫んだ。

準決勝の試合を5対4で辛勝し、決勝を翌日に控え部員たちは練習をしていると、川島は監督に呼ばれた。
「宮田はもう長くは無いらしい、お前は練習の手伝いをせずに宮田のそばにいてやれ、宮田の幼なじみだろ、きっと嬉しいはずだ」
「はい……、わかりました……」
川島はどっと涙が溢れ出た。そして、走って病院へ向った
「優希！！！」
川島は息を切らして病室に入った。ここには、宮田の家族や友人が詰めかけていた。
「なんでこうなってしまったの？一体誰のせいなの？どうか神様優希を助けてください」
泣きじゃくりながら叫んだ。

「優希は入院した翌日に意識を失ったまま、昏睡状態になってたの、いつ亡くなっても仕方ない状態だったんだけど、よく頑張ってくれたわ……」
宮田の母がか細いで説明した。
「ほら、南だよ、よく頑張ってくれたね。ガンバ程々にいた頃の事思い出して。あの頃は毎日遅くまで野球やってたよね、私コントロール悪くてよくボール探しに行ったっけ、今でも忘れないあの日の事覚えてる？私が思いっきり投げたボールが肥溜めの中に入っちゃって、糞まみれになりながら探したっけ、そのときのボールまだ持ってるよ」
そう言うと、鞄から褐色に変色したボールを取り出すと、宮田の右手にボールを握らせ、その手を両手で包んだ。
「そしたら、見つけたは良いけど二人揃ってお母さんに怒られたっけ、汚いだの、臭いだの……、でも楽しかった、幸せだった、優希と野球出来たことは一生忘れないよ」
そう言って川島は涙を零し、宮田はほんの少し笑ったような気がした。
「脳波が、心電図共に反応が無くなりました。15時34分を持ちまして宮田優希さんはお亡くなりになりました」
医者が宮田が死亡したことを告げ、宮田は天国へ旅立っていった。
「優希！！！！！」
川島は宮田の亡骸に抱きついた。死んだはずなのにまだ、温かかった。部屋の中にいた人々は皆泣いていた。

そして迎えた決勝当日。
「皆知っての通り昨日、マネージャーの宮田優希が亡くなった、彼女の世話になった部員も多いことだろう。彼女の夢は甲子園に行くことだそうだ、彼女は残念ながらその夢を果たせなかったが、我々が甲子園で戦っている姿を天国からきっと見守ってくれることだろう。宮田の事も思って今日の試合に臨みたい」

監督がそう言うと、泣き出す部員が数名いた。
「悲しんでいる時では無い、勝って天国の宮田に笑顔を届けよう」
一時間後試合が開始された、本日の相手は甲子園常連校、エースのハンケツ王子こと斉藤勇気擁する早稲田失業だ。
ハンケツ王子は甘いマスクと、ユニフォームの臀部切り取った魅力的なルックスもさることながら、これまでの試合を防御率１．５２で抑えてきた実力派投手だ。打線も強力で全打者の打率の平均は３．１６と非常に打つ。
初回、早稲田失業の攻撃、１番、２番と安打で出塁された後、３番が内野ゴロで倒れ、一死二三塁のピンチに４番山田太郎が安打を放ち２点を先制される。その裏の攻撃はハンケツ王子に三者凡退に仕留められる。そして、投手の浅野は目を覚ましその後の点を許さなかった。
そして、迎えた９回裏、ツーアウト１，２塁のチャンスに四番柏木、ホームランが出ればさよなら逆転勝利となる。柏木はバッターボックスに立つと、さあ来いと雄叫びを上げた。
ハンケツ王子セットポジションから第一球目、空振りストライク。快速球に柏木は振り遅れていた。第二球目、ボール低めの変化球を見逃した。第三球目、バットの真上をこすりファールとなった。
ワンボール、ツーストライクと追い込まれた第四球目、真ん中高めのストレートを綺麗に振り抜いた。カキーンと気持ちの良い金属音が球場に響き打球はレフトに高々と飛んでいった。左翼手が全力で追いかけて行ったが打球はぐんぐん伸びていき、ボールはスタンドに吸い込まれて行った。
柏木はダイヤモンドを思いっきり走ると仲間が待っていたホームベースを踏み、片腕を天に高々と上げた。
程々高校が優勝した瞬間だった。

程々高校が優勝を決めた数日後、テレビ局や雑誌の取材に来る人々が沢山押しかけてきた。しかし、その中に白衣を纏った怪しい二

人組が現れた。
「こんにちは、加地さん、私どもはスポーツ健康機構の者です。おたくの選手達がドーピングをしているのではないかという投書がありまして調査に参りました」
加地監督は初めは潔白で何も悪いことはしていないと、拒否したが、二人組に様々な証拠を突き付けられ渋々了承した。
選手達は検査を受けると、ドーピングに該当する薬物が次々と検出された。さらに覚醒剤の反応まで出たことから、翌日、大会を主催する全国高等学校野球連盟から野球部の解散が言い渡された。
そして、甲子園に出場すること無く程々高校の夏が終わった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1434u/

もし高校野球の女子マネージャーがドラッグでマネジメントをしたら

2011年6月23日23時07分発行